

第47回

テヘラン/イラン
Tehran Iran

難儀なイランの受難

——イスラエル＝アメリカ帝国の逆襲

リクルート＝スタディサブリ講師 村山 秀太郎

着いたら、いきなりイラン！

真夜中のイスタンブール、ケマル・アタチュルク国際空港からテヘラン行きのトルコ航空機に乗り込んだ1990年某日。機内で文庫本を読み始めると、隣の座席の20歳くらいのイラン人女性が私に、正確には私が読んでいる書物、縦書きの本に関心を示してきた。ひとしきりおしゃべりをした後、睡魔との闘いに敗れ、しばらくして眠りから覚めると、テヘランへの最終アクセスのアナウンス。それを聞き隣の女性は、バッグから布を出してしっかり丁寧に髪の毛を隠した。サヨナラをして入国審査の列に並ぶと、偶然にも隣の列の同じ順番待ちがその女性だった。それで機内と同じノリで話しかけたら、なんと完全無視。機内では眠いのを我慢して付き合っていたのに……。数メートル先は紛れもないイランだった。

深夜4時。空港でタクシーに乗り込み「シェラトンかヒルトンはある？」と尋ねると、「両方ある」と。「じゃあ、大きい方に！」と言うと、約40分後にヒルトンに滑り込んだ。そのホテルはたしかにヒルトンの形状でルームキーにはHiltonと刻印されているが、ホテル名はエステグラルとなっていた。目覚めた後に売店に行ってみたら、文房具と洗面具そしてコーランなどしか置いていなかった。79年に誕生した革命政権がアメリカ資本を接収したのだ。

イスラーム革命のイラン革命

78年1月に始まったイラン革命は、パフラヴィー朝第二代国王体制に、テヘラン住民の要請で亡命先から戻ったイスラーム教シーア派(12イマーム派)のホメイニ師を精神的指導者として樹立された政権が取って代わった政変だ。冷戦相手ソ連の隣国として、アメリカはパフラヴィー2世を援助しつつ、脱イスラーム化と世俗主義を後押しした。国王は公娼制度まで容認する一方で、秘密警察によってイスラーム勢力を弾圧。12イマーム派とは、7世紀の預言者ムハンマドの孫アリを初代イマーム

(指導者)とし、彼から数えて12代目のイマームがどこかに隠れているが、しかるべき時に再臨し、世界を「楽園」に復興するという宗派だ。

79年4月、イランは国民投票に基づきイラン・イスラーム共和国の樹立を宣言。アメリカに亡命した国王の引き渡しを要求し、国王の身の安全を危惧した米国政府が拒んだ報復として、学生たちがテヘランの米国大使館員を人質にして444日間も監禁。その結果、米国はイランと国交を断絶、経済制裁を科し現在に至る。



パフラヴィー元国王



初代最高指導者
ホメイニ師



第2代最高指導者
ハメネイ師